

知の港から

4

京大附置研シンポ前に

なぜ人は、人間を肌の色で分類し、それぞれに価値を付けたがるのでしょうか。皮膚の色は人類の移住に伴う環境適応の結果で、分類は西洋の価値観が生んだに過ぎないのに、なぜ、受け入れてしまおうのでしょうか。

欧州では伝統的に、黄色に「裏切り者」という意味を与えてきました。古来、欧州人にとってアジアの脅威はモンゴルでしたが、日本も日露戦争に勝った後、脅威と認識され、「黄色人種」の代表格になりました。阪神大震災の後、定住外国人への支援策の調査で兵

外国の文化尊び共生を

人文科学研究所

竹沢 泰子 教授 54



庫県に入り、在日朝鮮人の子弟が通う学校に避難した高齢男性に会いました。男性はこの学校を「テロの教育をしてる」と信じていたそうです。ところが、「偏見だった」と涙ながらに話しました。避難生活で在日朝鮮人の人々と語り合い、そう悟ったというのです。

神戸市出身。筑波大比較文化学類卒。専門は文化人類学。シンポでは「日本人移民の歴史と多文化共生社会の明日」と題して講演する。

増えるでしょう。日本は人口が減り、活気が失われつつあります。多様なルーツを持つ人々とともに多文化的文化の花を咲かせることができるなら、社会が再び活性化するはずです。

多様な人々が共生する上で重要なのは、互いの歴史や文化を尊ぶことです。一方が「受け入れる」という構図ではなく神戸の男性のように語り合いを持つ、対等な関係が大切なのです。「人種」という言葉が脳裏にあったとしても、それはただ一つの価値観が生んだものと理解できれば、心のつかえもとれるはずで

シンポは17日午前10時から「神戸国際会議場メインホール」（神戸市中央区港島中町6の9の1）で。無料だが、事前申し込みが必要。シンポ専用ウェブサイト（<http://www.kuic2012.jp>）か、京大経済研究所内「京都からの提言」事務局のファクス（075・753・7193）へ。先着700人。問い合わせは同事務局（075・753・7102）へ。